琉球大学学術リポジトリ

宮古語来間島方言における強変化動詞の終止的形式

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学島嶼地域科学研究所
	公開日: 2020-09-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ヤロシュ, アレクサンドラ, Jarosz, Aleksandra
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46727

『国際琉球沖縄論集』第 8 号
2019 年 4 月

【研究論文】

宮古語来間島方言における強変化動詞の終止的形式

アレクサンドラ・ヤロシュ※

Conclusive Forms of Strong Conjugation Verbs in Kurima-Miyakoan

Aleksandra JAROSZ

要旨

本稿では、2018 年に行われた現地調査の中間結果に基づき、宮古語来間方言の活用体系の部分的な記述を試みる。来間方言および本調査に関する基本情報を述べた上で、来間方言における強変化動詞の終止的形式について、確認できた範囲で紹介する。形式を重視した記述方法を取り、来間方言の動詞を強変化動詞、弱変化動詞、そして不規則動詞と 3 つの活用グループに分類し、語幹中の音韻交替を基準に、強変化動詞をさらに 3 つのサブタイプに分ける。それから、肯定・否定の区別を明記しながら、非過去叙述、過去叙述、受身・可能、意志、要求・希望、命令、そして禁止、あらゆる終止用法の接尾辞を紹介する。

Abstract

In this paper I will attempt to describe a fragment of Kurima-Miyakoan verb system, based on the fieldwork I conducted in 2018. After introducing basic information on the Kurima regiolect as well as the present study, I will propose a formal classification of Kurima conjugation classes into strong, weak and irregular verbs, and divide strong verbs into further three subgroups with stem alternations as the main criterion. Subsequently, I will present a description of inflection patterns of strong conjugation verbs to the extent I managed to cover in my study this far. The description will focus on conclusive forms and involve the following categories: non-past indicative, past indicative, passive/potential, volitional, desiderative, imperative and prohibitive, furthering the division into affirmative and negative where applicable.

１．背景情報

1-1. 本研究紹介

本稿は 2018 年 3 月と 7 月に来間島で行われたフィールドワークに基づき、宮古語来間方

※ ニコラウスコペルニクス大学日本学科准教授、琉球大学島嶼地域科学研究所客員研究員
Associate professor, Nicolaus Copernicus University; Visiting professor, Research Institute for Islands and Sustainability at the University of the Ryukyus.

言動詞体系の分析を試みる。現在まで実施できた調査が断片的であること、ならびに枚数の限定などの理由から本稿を中間報告とし、得られた用例から把握できた範囲で強変化動詞の終止用法、およびそれを標識する終止的接尾辞をいくつか紹介する。必要に応じて、明記の上で先行研究のデータを踏まえる場合もある。

表記上の一貫性を重視し、本稿では先行研究を引用する場合に、引用の資料で使われる音声記号を本稿で使われる記号に転写することにした。元来の表記法が気になる方は該当原本を参照されたい。

活用体系の分析方法は形式を重視している形態論中心的なものではあるが、それぞれの形式の機能にも極力言及する。

調査協力者は 1951 年来間島生まれ育ちの国仲富美男氏である。年齢は 60 代で、比較的若い堪能話者である。方言使用は年配の人との会話に限られており、同世代の人とは ffima-vtsɿ（来間島方言）をあまり使わないという。調査方法として、例文通訳と例文作成が基本的であった。

1-2. 来間方言の基本情報

来間島は宮古諸島に属する離島の 1 つで、宮古島の南岸より 1,5 km ほど離れたところに位置している。面積が 2.84 平方 km で、人口は 165 人である（平成 29 年度統計による）。島民はサトウキビや葉タバコの栽培を中心に生計を立てている。

来間島で伝統的に話されてきた来間方言は宮古語における地域語の 1 つである。系統上は中核宮古方言に属し、城辺地区の西里添、福里や比嘉と共通改新に基づいたグループを成している[Pellard 2009 : pp. 295]。

他の宮古語ならびに琉球語と同様に、来間方言も絶滅に瀕している言語である。本調査協力者から得られた社会言語学的な情報によると、来間方言が堪能に話せる年齢層は大概 80 代以上で、50 代以上の潜在話者がいるとしても、普通は日常生活で ffima-vtsɿ をあまり使わない現状である。

字来間の詳細な統計データがなく、話者の絶対数が把握しにくいものの、離島の高齢化なども考慮し、比較的に若い話者・潜在話者も含めて全体人口の 1/4 の程度とすれば、話者が現在 40 人ほどいるというのが楽観的な推算である。

1-3. 先行研究

調査報告書の形で来間方言の音韻、動詞の変化、名詞の変化、ならびに語彙を記録したのが内間 2003 である。当然ながら、中でも動詞の活用を取り上げた一章は本稿で参考にしている内容である。仲宗根他 1968 は数百の項目にわたり、来間方言を含め 5 つの宮古方言の語彙・表現を収録している。中本 2000 は来間方言音韻の記述である。野原 1990, 1991 は来間方言の助詞を扱っているが [1)]、「助詞」とされる形態素の中には動詞の活用体系の一部と見なすべきものも多く、用例も豊富などの理由から、本研究でやはり大きく参考になっている。

正確には来間方言ではないが、地理的に近く、系統的にも近く参考とすべき記述として、セリック 2018（皆愛方言の簡略記述・談話資料・語彙集）、名嘉真 1992（与那覇方言、保良方言などの動詞体系）、およびかりまた 2007（保良方言における条件表現）などがある。さらに、狩俣 2012 は大規模な現地調査に基づき、宮古語諸方言における活用体系の形式を

網羅したものであり、その中には来間方言の在り方もいくつか取り上げられている。

なお、杉村孝夫 2003『来間島方言の記述的研究』という成果報告書の存在（Pellard 2009、セリック 2018 など）も報告されているが、入手が困難なため、本稿では言及できない。

2. 来間方言における動詞活用グループ

語幹の音韻構造、特に語幹末の音価、代表形（非過去叙述肯定形）、並びに語幹中における音韻交替の在り方などを基準にすると、来間方言の動詞を表 1 のように、強変化、弱変化、不規則変化といった 3 つの活用グループに分けることができる。

表 1　来間方言動詞の活用グループ分類

グループ	語幹末音韻	代表形 （非過去叙述肯定形）	語幹音韻交替	例
強変化	i 以外の音韻	語末音が ɿ もしくは o: もしくは u:	あり	jum-「読む」、az-「言う」、its-ɿ「行く」
弱変化	i	語末音が i もしくは iz	わずか[2]	amai-(z)「笑う」、biraki-(z)「転ぶ」、mi:-(z)「見る」
不規則動詞	i 以外の音韻	語末音が ɿ もしくは ɿ:	あり	s-ɿ:/as-ɿ「する」、ts-ɿ:「来る」

強変化動詞と弱変化動詞との肝心な相違点は語幹末音の音価、並びに語幹中の音韻交替の有無にあることが分かる。この観点からすれば、不規則動詞は弱変化より強変化の方に近い。ただし、語幹に付く接尾辞は強変化動詞の場合に大概同じである一方で、不規則動詞に付くものは形式がそれと異なり、すなわち強変化動詞に付く接尾辞の異形であるために強変化動詞と不規則動詞を区別する。

強変化動詞における語幹中の音韻交換に関しては、表 2 の通りのものが確認できた。

表 2　来間方言強変化動詞における語幹音韻交替

交替	動詞の例	交替語形の例
ts/k	itsɿ「行く」	its-ɿ（非過去叙述肯定）、ik-adi（意志 2）
z/r	uz「いる」	uz-（非過去叙述肯定）、ur-an（非過去叙述否定）
z/zz	z:「叱る」	z-z（非過去叙述肯定）、zz-aritaz（過去受身）
m/mm	jum「読む」	jum（非過去叙述肯定）、jumm-u（名詞化の対格）
u/a[3]	umu:「思う」	umu-u（非過去叙述肯定）、uma-an（非過去叙述否定）
o/a/e	fo:「食べる」	fo-o（非過去叙述）、fa-i（中止）、fe-e（命令）

語幹の音韻構造および語幹中の音韻交替に基づくと、強変化動詞はさらに以下のサブタイプに分けられよう。

ア）語幹が子音で終わる、いわば「典型的な」強変化動詞。例：jum-「読む」、jum-an「読まない」、 jum-i「読んで」。

イ）語幹が母音で終わる母音強変化動詞。これらの語幹末音は u か o であり、表 2 で見たように、一部の活用形においてはその母音を a、もしくは e と交替させる。例：o-o「喧嘩する」、a-an「喧嘩しない」、 a-i「喧嘩して」。

ウ）存在動詞・状態動詞 az「ある」、uz「いる」、およびその iz「である」のような派生語。これらの動詞では過去形など、歴史的に連用形対応形であったと思われる活用形式の一部においては、語幹末の z/r 子音が脱落する。例：uz- 「いる」、ur-an 「いない」、u-taz「いた」。

3. 来間方言における強変化動詞の終止的な形式

現在までに確認できた終止的な形態素（接尾辞）を紹介するものが表 3 である。接尾辞およびそれらの創り上げる活用形の名称はその代表的と思われる機能にちなんで付けられている。

要求・希望形に関しては、-buskaz は本調査で欠けている形なので、内間 2003 に基づき取り上げる。

表 3　来間方言強変化動詞の終止形（終止的接尾辞）

叙述				受身・可能		意志		要求・希望	命令	禁止
肯定		否定		肯定	否定	肯定	否定			
非過去	過去	非過去	過去							
-ɿ; -u; -o; -Ø	-ɿtaz; -utaz; -otaz; -taz	-an	-attam	-ari (z)	-arun	1. -a; 2. -adi; 3. -attɛa	-adja:n	-ɿbus (kaz) ; -ubus (kaz) ; -obus (kaz) ; -bus (kaz)	-e; -e:	-ɿna; -una; -ona; -na

3-1. 叙述

3-1-1. 叙述肯定

3-1-1-1.非過去叙述肯定

非過去叙述肯定形をここでは動詞の代表形としても捉えている。この形式を取った動詞は単文末、複文の主節末、および連体修飾節の述語の位置に現れる。

（1）Hon-nu jumm-u　sɿguto: ɛ-i=uz.

本-GEN　読むこと-ACC 仕事.TOP する-MED=PROG.NPST

本を読むことが大好きだ。（逐語訳：本を読むことを仕事にしている。）

連体修飾の位置と言えば、言い切り形との形式上の区別、すなわち古典語で言う連体形と終止形に当たるような区別は強変化動詞には見られない。焦点標識-du と共起する用例に関しても同じ結論になる。

（2）Tunaz-nu oba:-ja　itsɿme: dojo:bi-na:-du　　tsɿnn-u:-ba　aro-o.

隣-GEN　おばあさん-TOP いつも　土曜日-ごと-FOC 服-ACC-TOP 洗う-NPST
隣のおばあさんは毎週土曜日に洋服を洗う。

（3）To:kjo:-n uz　　dusɿ-nu-du　　ara=kurumo:　ko-otaz=ttɕa.
東京-DAT いる.NPST 友達-NOM-FOC 新しい=車.TOP 買う-PST=HRS
東京に住んでいる友達が新しい車を買ったそうだ。

さらに、非過去叙述肯定形は疑問辞-ga、うらめ接続辞-suga、そして-ira,-do:などのようなあらゆる終助辞もホストできる。

（4）No:ɕi-nu　sumuttɕ-u-ga　　jum-juz=ga?
どんな-GEN 本-ACC-WHFOC 読む-PROG.NPST=WHINT
どんな本を読んでいる？

（5）Unu midumm-a mango-o-ba　jum-suga,　ɕo:settɕ-u-ba　jum-an=ttɕa.
その 女性-TOP　漫画-TOP-ACC 読む.NPST-が 小説-ACC-TOP 読む-NEG.NPST=HRS
彼女は漫画は読むが、小説は読まない。

（6）Amai dʑo:-kaz ba:-tu　ar-am　　ba:-tu　　az=ira.
笑う.MED いい-VRB 時-COM COP-NEG.RLS 時-COM　ある.NPST=ね
笑ってもいいときとそうでないときがあるよね。

（6）の用例では調音のペースが速いと、動詞末の z と接尾辞-ira が同化し、発音が azzira になる。

非過去叙述肯定形はモーダル的な要素とも共起することがある。その 1 つは形式名詞の一種と思われる[4] gamata である。gamata/kamata/gumata 系の形態は宮古語全体に広く分布しているようであるが、その機能にはかなりの地域性が見られ、一貫性があまりない。例えば、狩俣方言[衣畑＆林 2014 : pp. 42]や伊良部諸方言[Shimoji 2008: pp.331-333]では未来というテンス的な機能が報告されている。

本調査で gamata は疑問文に出場し、これからの動作に関する相手の意志・決定を尋ねる使用が確認されている。後述する意志 2 の接尾辞-attɕa、または確定条件の接尾辞-iba で置き換えることもしばしば可能であるが、その両形式と比べれば、gamata を使った聞き方の方が強く、真相や説明をそっけなく求めるニュアンスが入っているようである。そして標準語の「べき」のように、動作を実現する適切性やそれに関する賛否評価も含む例文も見られた。

さらに、まだ確認できていないが、野原 1991 : pp. 17 では、ja:ninu sangatsɿndu sasagiu ssɿkamata「来年の三月に結婚する」のように、肯定文で動作主の予定・計画を表すことも報告されている。一括して言えば、品詞や機能の点で、gamata は標準語の「つもり」と似ている点が多い[5]。

（7）No:-ju-ga　　fum　　gamata?
何-ACC-WHFOC 履く.NPST つもり

どんな靴を履くの？

（8）Vva:-ta:-ja aɕu-u-ba　no:-ju-ga　fo-o　gamata?
君-PL-TOP　昼ご飯-ACC-TOP 何-ACC-WHFOC 食べる-NPST つもり
君たちは昼ごはんに何を食べる？

「ご飯は何にする？」という意志 3 の標識-attɕa を含む（25）と比べ、（8）では「何を食べるの？」、「食べるのがあるの？」と話し手の思いめぐらす聞き手への気遣いが表面化している。

（9）Kju:-ja　im-ke: its-ɿ　gamata?
今日-TOP　海-DIR　行く-NPST つもり
今日は海に行くのか？

この用例では「本当に行きたいの？」、すなわち行く決心がどれほど強いか、と相手に問いかけるようである。このような質問に続き、「魚を捕ってほしいから」と話者の希望が表現される場面も想定できるという。

3-1-1-2.過去叙述肯定

過去叙述肯定形は統語論上、非過去形と同じ環境に現れる。（11）で分かるように、疑問辞のような接尾辞もホストできる。

過去形の接尾辞の基本形態は-taz で、最後の z を任意的に脱落させ-ta:と発音することもしばしばある。

（10）Kanu psɿ-nn-a　sɿma-pstu m:na-ɕi-du　ka-nke: nigo-otaz.
あの　日-DAT-TOP 島-人　皆-INST-FOC 神-DIR　祈る-PST
あの日は村全員で神へ（無事などを）祈った。

（11）Ndʑa-nke:-ga　utsɿts-ɿtaz-gara:, tumi-ro:-n.
どこ-DIR-WHFOC 置く-PST-UNC 探す-POT-NEG
（探している靴を）どこへ置いてしまったのだろう、見つけられない。

それから、用例（12）は過去叙述肯定形において語幹末の-z を脱落する強変化動詞ウ）サブタイプの一例である（章 2 参照）。

（12）Biki-jarabi-nu-kja:-ja kabi-tuzz-a tsɿff-i asp-i　uz
男-子供-GEN-PL-TOP 紙-鳥-TOP 作る-MED 遊ぶ-MED PROG.NPST munu-u-du mi:　u-taz.
もの-ACC-FOC 見る.MED PROG -PST
男の子たちは凧を作って遊んでいるのを見ていた。

3-1-2. 叙述否定

3-1-2-1. 非過去叙述否定

非過去叙述否定形の統語論的な振る舞いは非過去叙述肯定形と通じており、そしてその

接尾辞は-an である。

（13）Ba-a pstu-tu-ja　a-an.

私-TOP 人-COM-TOP 喧嘩する-NEG.NPST

私は人とは喧嘩しない（逐語訳：争わない）。

3-1-2-2. 過去叙述否定

過去叙述否定形の接尾辞は-attam である。

（14）Kunu saro-o-ba　aro-otaz=suga, kunu saro-o-ba　ar-attam.

この　皿-ACC-TOP　洗う-PST=が　この　皿-ACC-TOP　洗う-NEG.PST

この皿は洗ったけど、あの皿は洗わなかった。

3-2. 受身・可能

3-2-1. 受身・可能肯定

弱変化動詞を含む本調査で集められたデータ、さらに野原 1990 : pp. 48 などに収録されているデータに基づけば、来間方言で受身と可能は同じ形態素をもって標識されるようである。ただし、強変化動詞に限って言えば、本調査で確認ができたのは受身形、しかも肯定形だけである。強変化動詞受身形の接尾辞は-ari で、それにさらに弱変化動詞と同様のテンス標識を付かせることにより終止用法の受身形を作る。

（15）Kano ɕiito-ja ɕukudai-no[6] ɕirjoː-ju jum-adana　ɕ-iː　ɕinɕiː-n　zz-ari-taz.

あの　生徒-TOP 宿題-GEN 資料-ACC 読む-MED.NEG する-MED 先生-DAT 叱る-PSV-PST

あの生徒は宿題の資料を読まなかったから（逐語訳：読まなくて）、先生に叱られた。

3-2-2.　受身・可能否定

前述の通り、本調査では強変化動詞の受身・可能の否定形が得られていないものの、調査協力者が 2018 年 11 月 24 日に出場された平成 30 年度の「危機的な状況にある言語・方言サミット」において（16）のような用例が出たので、これを紹介する。

（16）で現れるのは可能形の否定形で、その接尾辞が-arun ということが分かる。さらに分析すれば、-ar は受身・可能に当たる形態素で、-n は非過去叙述否定の形態素であろうと思われよう。

（16）miz=mata-tsɿm aruk-aru-n

三=歩-さえ　歩く-POT-NEG.NPST

三歩も歩けない。

3-3. 意志

現在まで、主語の意志・意図を表現する形式が 3 つ確認できた。それらの使い分けがかなり細かいようで、未詳のところもまだ多い。

3-3-1. 意志 1

強変化動詞の意志 1 接尾辞が-a である。これは動作を行う話者の意志あるいは決心を表現する形式のようである。内間 2003 : pp. 129 の例を踏まえてみると、動作主が聞き手を含

む、一種の包含性と思われる誘いかけの機能も目立つ。

（17）Kunu pano-o-ba　　unu panaiki-nke: ʑʑi　uk-a.
この　花-ACC-TOP　その 花瓶-DIR　入れる.MED RES-VOL1
この花はその花瓶に入れておこう。

3-3-2. 意志 2

強変化動詞の意志 2 接尾辞が-adi である。（18），（19）のように、主語が将来の動作へ積極的に向かう場面に使われる。また、(20）のように、相手の意図を尋ねる文にも頻出している。こうした疑問文が標準語の非過去叙述（狭義の終止形）の訳として現れていることから、-adi には一種のテンス的な側面があることも考えられる。

（18）No:-ju-ga　　fa-adi?
何-ACC-WHFOC 食べる-VOL2
何を食べる？

（19）Ka-nke: niga-adi.
神-DIR　祈る-VOL2
神へ祈ろう。

（20）Atɕa-nu　kunɕinkai-nn-a　no:ɕi-nu　kuttɕ-u-ga　fum-i　ik-adi=ga?
明日-GEN 懇親会-DAT-TOP どんな-GEN 靴-ACC-WHFOC 穿く-MED 行く-VOL2=WHINT
明日の懇親会にどんな靴を履いて行くの。

さらに、引用接尾辞-ti を使うと、主観的（内向的）であるはずの-adi が客観性（外向性）を持つようになり、第三者の行動に関しても使えるようになる。

（21）Tunaz-nu mju:to-o kuɕipir-adi=ti-nu　panass-a tsɽk-i-d-u-z?
隣-GEN　夫婦-TOP 引っ越す-VOL2=QUOT-GEN 話-TOP　聞く-MED-FOC-PROG-NPST
隣の夫婦が引っ越ししていくという話を聞いた？

「～うとする、～うとおもう」という標準語の計画・意図表現の対応文型に、来間方言では-adi プラス引用標識の-ti sɽ:「とする」もしくは-ti umu:「と思う」という形式がある。この形式では、砕けた話し方で-aditi が融合して -atti になるという総合化への動きが明確に見られる。グロスでは便宜上、この-atti に INT、つまり「意図・予定・計画」という注釈をつける。

（22）Toɕoka-n　ik-i, kunu sumuttɕ-u jum-adi=ti　（> jum-atti）　umu-i-u-z.
図書館-DAT 行く-MED この 本-ACC　読む-VOL2=QUOT（読む-INT）思う-MED-PROG-NPST
図書館でこの本を読むつもりだ。

（23）Bugari-kar-ja-me:　juk-atti-ja　uma-an.
疲れる-VRB-PRV-INC 休む-INT-TOP 思う-NEG.NPST
疲れていても休もうとは思わない。

（24）Bugarikarja-me:　juk-atti-ja su-un.
疲れる-VRB-PRV-INC 休む-INT-TOP する-NEG.NPST
疲れていても休もうとはしない。

3-3-3. 意志 3

強変化動詞の意志 3 接尾辞が-attɕa である。現在まで集められた用例の中で、意志 3 は疑問文において現れ、相手の予定を尋ねる用法が中心である。

意志 3 の正確な使い方および意志 2 との区別、肯定文での利用などは未確認である。ただし、調査協力者によると、（25）のように、意志 2 の（20）と比べれば、意志 3 の方は「相談のニュアンスも含んで」「柔らかく聞こえる」という。それから、（26）のような用例では話者が自分自身のこれからの動作を自問自答の形で検討する場合にも使える [7)]。

なお、野原 1991 : pp. 15 ではこの-ttɕa およびその異形が「念押し、推量」とされているが、ここは 2 つの異なる形式が混合されていると思われる。ja:manke: piztazttɕa「八重山に行ったよ」のように、 叙述肯定形に付く「念押し」の用法は実際に伝聞を表す接語-ttɕa と同じもので、「念押し」はその機能の拡大と思われる。語幹に付く-attɕa とは形式上にも、機能上にも区別される形態素である。

（25）Atɕa-nu　kunɕinkai-nn-a　no:ɕi-nu kuttɕ-u-ga fum-i　ik-attɕa?
明日-GEN 懇親会-DAT-TOP どんな-GEN 靴-ACC-WHFOC 穿く-MED 行く-VOL3
明日の懇親会にどんな靴を履いていくの？

（26）No:-ju-ga　idas-attɕa?
何-ACC-WHFOC 出す-VOL3
〔お客さんへのごちそうは〕何を出せばいいかな？

3-3-4. 意志否定

意志否定の-adja:n という接尾辞が強変化動詞に付き、「したくない」、「しようと思わない」、「することを拒否する」のような意味を表す。これは意志 2 -adi の否定対応形として扱ってもよかろう。語源的にも意志 2-di プラス非過去否定-an > dja:n の組み合わせからできたという可能性も充分考え得る [8)]。

（27）Kano ɕi:to-ja　jum-adja:n=ti:-du,　ɕinɕi:-n　zz-ari-taz.
あの　生徒-TOP 読む-NVOL=QUOT-FOC 先生-DAT 叱る-PSV-PST
あの生徒は宿題の資料を読まなかったから（逐語訳：読みたがらないで・読むのを拒否して）、先生に叱られた。

3-4. 要求・希望

要求・希望を表す強変化動詞の形は代表形、すなわち非過去叙述肯定形に形容詞語幹（下地 2008 などで言うの Property Concept Stem）由来の接尾辞-bus を付けることで形成される。したがって、要求・希望の接尾辞に-bus, -ɳbus, -ubus, -obus のような異形態が認められる。

これを終止用法として文中に用いるために、肯定文の場合はさらに-kaz と接尾辞を、否定文の場合は-ffa nja:n と分析的な要素を付け述語化させる必要がある。

以下の（28）は動作主が 1 人称の場合、当該形式-bus の動詞化形-buskaz が使われることが分かる。ところが、（29）のように動作主が 3 人称の場合、-bus の名詞化形と sɿ:を合わせた bussa sɿ:という文型が使われる。要するに、これは話者・非話者、言い換えれば主観性・客観性の区別が見られる、標準日本語における「がる」などに通ずる面も見せる興味深い現象である。

（28）Ba-a itsɿme: minjo:-ju-du tsɿts-ɿbus-kaz.
私-TOP いつも 民謡-ACC-FOC 聞く-DES-VRB.NPST
私の趣味は民謡を聞くことだ。（逐語訳：私はいつも民謡を聞きたい。）

（29）Itsɿme: minjo:-ju-du tsɿts-ɿbus-sa s-ɿ:.
いつも 民謡-ACC-FOC 聞く-DES-NMN する-NPST
（彼の）趣味は民謡を聞くことだ。（逐語訳：いつも民謡を聞きたがっている。）

3-5. 命令

強変化動詞の命令形接尾辞は-e:である。語幹末が子音の動詞では-e:はそのまま語幹に付く一方で、(31) のように語幹末音韻が o の場合にその母音の e[9] への母音交替が起こる[10]。

（30）Kuitɕa-ju s-u:ttɕ-iba, mako-o tsɿff-e.
くいちゃ-ACC する-QUOT -PRV 輪-TOP 作る-IMP
くいちゃをするから、輪を作れ。

（31）Ka-nke: nige-e.
神-DIR 祈る-IMP
神へ祈れ。

今まで調べた範囲で言及すれば、来間方言の動詞は他の宮古地域語と異なり、nigai と nige:, fai と fe:のように、少なくとも母音強変化動詞において接続形と命令形が音韻的に区別される。表 4 のように、これらの 2 つの形は多くの宮古方言で統合してしまっている一方、多良間方言ではそれらの区別が来間のと逆になっていることが分かる。

表 4. 宮古諸方言における接続形と命令形[12]

意味	活用形	来間	多良間	平良	長浜
食べる	接続形	fai	fe:	fai	fai
	命令形	fe:	fai	fai	fai
買う	接続形	kai	ke:	kai	kai
	命令形	ke:	kai	kai	kai

以上を踏まえて起こり得る変化の経緯を考慮すると、宮古祖語（共通宮古語）の段階の

命令形接尾辞を*-e、接続形接尾辞を *-i と暫時的に再建できる。

宮古祖語分岐後に、多良間方言で接続形語末における/ai/が融合し/e:/となり：

「食べて」宮古祖語　*fai > 多良間方言 fe:、その他 fai のまま；

そしてそれに次いで、多良間方言にも、他の方言にも命令形語末の*e が狭母音化して/i/となった反面、来間方言では直接*ae > e:という独自の変化をたどっていると思われる。

「食べろ」*fae > 来間方言 fe:、その他 fai。

要するに、この来間方言のデータは宮古祖語の分岐後というかなり遅い時期まで、接続形と命令形の区別が保たれていたことを検証しているだろうという興味深い結論につながろう。同時に、音韻レベルでの半狭母音/e/も宮古祖語の分岐後まで残存していたという重要な点も示唆している[13)]。

3-6. 禁止形

禁止を表す基本形態素が-na である。この強変化動詞の-na にも-ɲna（matsɲna「待つな」）、-una（nu:na「縫うな」）、-ona (fo:na「食べるな」)のような異形があることが確認されている。

（32）Ukas-kar-iba!　Nu:z-na!
恐ろしい-VRB-PRV 上る-PROH
危ない！上るな！

略号

ACC accusative 対格
COM commitative 共格
COP copula 繋辞
DAT dative 与格
DES desiderative 要求・希望法
DIR directive 方格
GEN genitive 属格
FOC focus 焦点
HRS hearsay 伝聞
IMP imperative 命令法
INC inclusive 累加
INST instrumental 具格
INT intentional 意図・予定法
MED medial 接続形
NEG negative 否定
NMN nominalizer 名詞化
NOM nominative 主格
NPST non-past 非過去
PROG progressive 進行相
PROH prohibitive 禁止法
PL plural 複数
POT potential 可能
PRV provisional 確定条件
PST past 過去
PSV passive 受身
QUOT quotative 引用
RES resultative 結果相
RLS realis 主張法
TOP topic トピック
UNC uncertainty 不確か
VOL 1 volitional 1 意志 1
VOL 2 volitional 2 意志 2
VOL 3 volitional 3 意志 3
VRB verbalizer 動詞化
WHFOC WH-focus 疑問詞疑問文焦点

注

1）なお、野原 1990、1991 の内容は後、野原 1998『琉球方言助詞の研究』（沖縄学研究所発行）といった琉球語全体におよぶ参考書にも掲載されている（322-371 頁）。

2）本調査で得られたデータでは見られない形式ではあるものの、内間 2003:pp.130-131 や狩俣 2012:p.76 の報告および野原 1990、1991 の用例によれば、uki-z「起きる」uku-n「起きない」uku-di「起きよう」のように、一部の弱変化動詞においても i/u の語幹音韻交替が生じるようである。このような形を狩俣 2012 は「混合変化の否定形」と名付け、来間方言の他に保良方言、与那覇方言、宮国方言、砂川方言など、宮古島南部の諸方言にも見られる。皆愛方言にも mjun「見ない」、ibun「植えない」のような形式が記録されている（セリック 2018）。

3）内間 2003: p.132 のように、理論上、命令形 ume-e を含んだ u/a/e という 3 対交替が予測される。ところが、調査協力者に確かめたところ、ume:のような形を聞いた記憶がなく、代わりに「保守的な命令形」と思われる umui、および他のムード形式が使われるらしい。

4）その根拠には、野原 1991:p.17 が報告する kamata/gamata 両異形の共存など、形式的なものがある。さらに、来間方言とは異なり、伊良部仲地方言のように未だに連用形と終止形・連体形を区別している地域語の gamata（もしくは gumata）の使用パターンを確かめると、やはり gamata に前置するのは連体形対応形で、それで gamata の元の姿も名詞であろうという結論になる（富浜 2013：p.877 参照）。下地 2008:pp.331-333 においても伊良部諸方言の gumata が統語論上で純粋な形式名詞の振る舞いをする用例が記録されている。

5）この指摘をいただいた Gijs van der Lubbe 氏に感謝の念を述べたい。

6）標準日本語へのコードスイッチングと思われる。

7）自問自答の用法は意志 2 を使ってもできるとのことである。

8）この宮古語諸方言に現れる形態素に関しては狩俣 2012:p.74 も「否定形の語末の n を dʑa:n、dja:n にとりかえた形式」とし、「話し手の意志や判断をあらわす」と記述している。

9）この形態音韻論的な現象を本稿で採用する記述法と一貫性をもって記述しようとすれば、nigo-o > nige-e のように、語幹末の o および u が e となり、それに命令形接尾辞の短母音からなる異形-e が付くことになる。

10）注記 3 でも言及したように、特定の動詞や話者により、命令形接尾辞が実際に-e ではなく-i である可能性があるとして、再確認が要る。

11）分析が不確実な箇所である。

12）多良間方言のデータは下地 2006、下地 2017、および筆者の 2018 年 11 月に行われたフィールドワークに、平良のデータは Jarosz 2015 に、そして仲地のデータは富浜 2013 に基づいて示している。

13）この宮古祖語の*fae はもしかすると上代語の甲類エ、すなわち je（Frellesvig 2010 参照）もしくはその痕跡を反映しているのも検討すべき可能性である。

文献

内間直仁代表（2003）『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究―宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書　国際印刷、那覇市。

狩俣繁久（1999）「宮古諸方言の動詞『終止形』について」『日本東洋文化論集』 5、pp. 27-51、

西原町。
狩俣繁久（2007）「宮古保良方言の条件形」『南島文化』 29、pp. 41-62、台湾。
狩俣繁久（2012）「宮古語の動詞活用―代表形、否定形、過去形、中止形」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合研究　南琉球宮古方言調査報告書』、pp. 69-110、国立国語研究所、東京都。
衣畑智秀、林由華「琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法」『琉球の方言』38、 pp. 17-50、法政大学沖縄文化研究所、東京都。
下地賀代子（2006）『多良間方言の空間と時間の表現』千葉大学学院社会文化科学研究科、千葉市。
下地賀代子（2017）『たらまふつ辞典。多良間方言基礎語彙』多良間村教育委員会、多良間村。
セリック・ケナン（2018）「南琉球宮古語下地皆愛方言―簡略記述・談話資料・語彙集」。『言語記述論集』10、pp. 97-249、大阪府。
富浜定吉　（2013）『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムス社、那覇市。
仲宗根政善他（1968）「宮古方言の研究」琉球大学沖縄文化研究所編『宮古諸島学術調査研究報告書』、pp. 1-62、琉球大学沖縄文化研究所、那覇市。
名嘉真光成（1992）『琉球方言の古層』第一書房、東京都。
中本　謙（2000）「宮古来間方言の音韻」『千葉大学日本文化論叢』1、pp. 15-28。
野原光義（1990）「来間方言の助詞（1）」『宮古、下地町調査報告書（1）-地域研究シリーズ No.16（1990.3.31）』、pp. 37-54、沖縄国際大学南島文化研究所、宜野湾市。
野原光義（1991）「来間方言の助詞（2）」『宮古、下地町調査報告書（2）-地域研究シリーズ No.16（1991.3.31）』、pp. 1-32、沖縄国際大学南島文化研究所、宜野湾市。
Frellesvig, Bjarke (2010) *A history of the Japanese language,* New York: Cambridge University Press.
Jarosz, Aleksandra (2015) *Nikolay Nevskiy’s Miyakoan Dictionary: reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis*, 博士論文, Adam Mickiewicz University, Poznan.
Pellard, Thomas (2009) *Ōgami – Éléments de description d’un parler du Sud des Ryūkyū* ［南琉球大神方言の基礎的研究］, 博士論文, École des hautes études en sciences sociales, Paris.
Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan laguage*, 博士論文 Australian National University, Canberra.

統計データ源

宮古島市・統計みやこじま平成 29 年
https://www.city.miyakojima.lg.jp/gyosei/toukei/files/h29_04.pdf
沖縄県・離島関係資料平成 30 年 1 月　第 1　指定離島・島しょ・人口
https://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chiikirito/ritoshinko/documents/1syou.pdf